

理由の全体論をめぐる論争のマッピング
Mapping the Debate on Holism of Reasons

小山寛季

Abstract

One central question in moral philosophy concerns what makes an action morally right or wrong. This question directly relates to the nature of normative reasons, as it remains contested whether reasons behave atomistically or holistically across contexts. This debate carries significant implications for the role of moral principles in ethical deliberation. While principlism has dominated Western ethical traditions, Jonathan Dancy has persistently defended moral particularism grounded in the holism of reasons. Examining the plausibility of holism by systematically surveying Dancy's arguments and the principal objections raised against them, this paper aims to clarify the argumentative landscape surrounding holism and identify remaining challenges for future inquiries.

(1) 研究テーマ

西洋の倫理学においては、「道徳的一般主義 (moral generalism)」が広く支持されてきた。しかし、イギリスの哲学者ジョナサン・ダンシーは、一般主義と対立する「道徳的個別主義 (moral particularism)」を擁護する論証を長らく展開してきた。そして、ダンシーの論証において重要な役割を果たすのが「理由の全体論 (holism of reasons)」である。それゆえ、ダンシーの個別主義を擁護するにせよ、批判するにせよ、まずはその論拠となる理由の全体論を検討することが必要であるように思われる。

本稿は、ダンシーが擁護を試みてきた理由の全体論やそれへの批判を検討することを通じた、論争点の整理を目的とする。2節では、ダンシーの主張、ダンシーへの批判をそれぞれ確認する。3節では、ダンシーへの批判がどれほど正当なものであるかを評価する。4節では、本稿の成果と今後取り組まれるべき課題とを整理する。

(2) 研究の背景・先行研究

本節は、(2.1) ダンシーの主張、(2.2) ダンシーへの批判、で構成される。

(2.1) ダンシーの主張

ジョナサン・ダンシーは『原理なき倫理学 (*Ethics Without Principles*)』(2004年)において、道徳的個別主義および理由の全体論の擁護を試みた。ダンシーは1980年代から継続的に個別主義関連のプロジェクトに取り組んできており、この著作はそのプロジェクトの集大成と言えるだろう。しかし、ダンシーの一連の議論に対してはこれまでに多くの批判が寄せられてきた。

ダンシーによれば、理由の全体論が真であることを論拠に、個別主義もまた真であることが導出されるという。以下ではまず、理由の全体論について概観し、それからダンシーの個別主義の内実を簡潔に確認する。

まず、ダンシーが分析するところの「理由 (reasons)」とはどのようなものか。アルヴァレスとウェイによれば、行為の理由にはみつつの区分がある (Alvarez and Way 2024)。すなわち、規範理由—ある行為を正当化する理由—、動機づけ理由—ある行為をなすよう行為者を導く理由—、説明理由—ある行為の原因をたんに説明する理由—である。これらのうち、ダンシーが『原理なき倫理学』で分析するのは規範理由である。たとえば、「なぜその行為をしてもよいのか？」(許容)、「なぜその行為をするべきなのか？」(当為)、「なぜその行為をしなければならないのか？」(義務)といった問いへの答えが規範理由にあたる。

さらにダンシーは、規範理由となるのは「貢献的理由 (contributory reasons)」という種類のものだと主張する (Dancy 2004, ch. 2)。たとえば、「わたしはそのネコを撫でてよい」という言明を考えよう。ここで、わたしの行為が正当化されるか否かにかんして、いくつかの考慮事項が存在すると考えられる。「そのネコは撫でられるとよろこぶ」、「わたしはネコアレルギーだ」などである (もちろん、他にもさまざまあるだろう)。このとき、前者は行為を支持するようにはたらくが、後者は行為に反対するようにはたらくように思われる。このように、行為を支持したり、反対したりするような考慮事項が貢献的理由であり、貢献的理由どうしの比較衡量によって、行為についての最終的な判断がなされるのである。この最終的な判断をダンシーは、裁判における評決 (verdict) に見立てながら、「総合的理由 (overall reason)」と呼んでいる。貢献的理由によって構成される総合的理由に基づいて、われわれは「わたしはそのネコを撫でてよい」という言明を正当化するのである。

ダンシーにしたがって、貢献的理由こそが規範理由を構成するのだと考えることにはいくつか利点がある。とりわけダンシーが強調するのは、葛藤 (conflict) や遺憾 (regret) にかんして適切に説明できる点である (Dancy

2004, 6)。たとえば、「わたしはそのネコを撫でてよい」との正当化が達せられ、じっさいにそのネコを撫でたとしよう。このとき、わたしは「そのネコは撫でられるとよろこぶ」という考慮事項にコミットしてそのように行為したと言える。しかしそれでも、「わたしはそのネコを撫でてよいのだろうか」と行為しながらにして葛藤することはありえるし、あるいは事後的に「撫でてよかったのだろうか」と遺憾の念を抱くこともありえる。葛藤や遺憾は、行為者がじっさいにコミットしなかった考慮事項—「わたしはネコアレルギーだ」—へのコミットメントへの表れであると理解されるべきである。

ここまでで、ダンシーが分析する理由とはなにかについて確認した。つづいて、ダンシーが擁護する理由の全体論と、その対抗的立場である「理由の原子論 (atomism of reasons)」という立場についてみていく。

理由論における**全体論**：ひとつの事例で理由となるある特徴は、べつの事例ではまったく理由とならなかったり、反対の理由となったりするかもしれない。

理由論における**原子論**：ひとつの事例で理由となるある特徴は、他のあらゆる事例で理由となり、おなじ極性を保持しなければならない。

(Dancy 2004, 7、太字は原文イタリック)

双方の立場は、行為を正しくする特徴 (right-making feature)、ないし行為を不正にする特徴 (wrong-making feature) の振舞いについて争っている。原子論によれば、そのような特徴は一定の仕方で振舞うのだと主張されるが、全体論はそれを否定するのである。

全体論者が自身の立場を採用する動機は以下のような疑義による。すなわち、たとえば、ある行為が他者を害することという特徴を有するとき、そうした特徴を有するあらゆる行為は道徳的に不正だと言えるのだろうか、ということである (cf. Hooker 2000, 10)。

ここで、原子論の枠組みに基づく説明をすることがいちおうは可能である。つまり、他者を害することという特徴はなお、つねに行為を不正にするのである。そうした行為が許容されるのは、(1) 他者を害することという道徳的に負の値をもつ特徴を上回るべつの特徴があるからだ、あるいは(2) 他者を害することという特徴はつねに行為を不正にするという言明はじつは条件つきだからだ、と説明することができる。

たほう全体論では、他者を害することという特徴はつねには行為を不正にしない、と説明される。原子論のように、行為の特徴はつねに一定の仕方で

振舞うのだと考えるのはもっともらしくなく、あくまで行為の特徴は道徳的に中立的な値しかもたないのである。ここでの論争点は、原子論と全体論とで、どちらがより魅力的な説明を行為の理由について提供するかにある。

ダンシーによれば、理由の全体論は、われわれが行為についての判断を下すさいにおこなう「実践的推論 (practical reasoning)」をうまく説明できるという。実践的推論とはつぎのような推論である。

1. わたしはそれをおこなうことを約束した。
2. わたしの約束は強迫のもとでなされなかった。
3. わたしはそれをおこなうことができる。
4. それをおこなわない、より大きな理由はない。
5. それゆえ、わたしはそれをおこなう。

5*. それゆえ、わたしはそれをおこなうべきだ。(Dancy 2004, 38)

この実践的推論における考慮事項について、ダンシーは支持事由／反対事由 (favourer/ disfavourer)、有効化事由／無効化事由 (enabler/ disabler) に分類する。それぞれを先の実践的推論にあてはめて考えよう。1 は行為を直接正当化する考慮事項として支持事由となる。2、3、4 は支持事由のはたらきを有効にする考慮事項として、有効化事由となる。5、5*は推論の結果となる判断であり、とくに 5*は当為判断である。ここで留意すべきは、支持事由が行為を支持するには、有効化事由が存在すること、ないし無効化事由が存在しないことが必要だということである。反対事由が行為に反対するためのはたらきを發揮するためにもまた、同様である。つまり、仮にわたしがそれをおこなうと約束したという支持事由が存在するとしても、その約束が強迫のもとでなされていたり、それをおこなうことができなかつたりすれば、支持事由はそのはたらきを發揮できなくなる (Dancy 2004, 38-43)。

以下では、理由の全体論から導出されるという、道徳的個別主義についてみてゆく。ダンシーはおおまかに言って、個別主義が真であることをつぎのように論証する。

1. 理由の全体論は個別主義が真であることを支持する。
2. 理由の全体論は真である。
3. したがって、個別主義もまた真である。(Dancy 2004; cf. 蝶名林 2015)

ただし、個別主義は道徳的一般主義と対立する立場としてありえるものなので、想定される一般主義のパターンに応じてさまざまなヴァージョンがありえる。ダンシーによれば、個別主義者にとってありえる戦略はふたつある。すなわち、(1) 妥当であると認められるような道徳原理はそもそも存在しないので、われわれの道徳的思考において道徳原理が果たす役割はまったくない、と主張するか、(2) 一般的な道徳原理は存在するかもしれないが、たとえ存在してもわれわれの道徳的思考において道徳原理が果たす役割はほとんどない、と主張するかである。ダンシーは(2)の戦略を採用する。というのも、(2)は道徳原理が存在してもしなくても成り立つ主張であることから、(1)に比べてより儉約的だからである(Dancy 2004, 2)。さて、ダンシーが念頭に置く個別主義および一般主義とは、以下の立場を指す。

個別主義：道徳的思考や道徳的判断の可能性は、道徳原理の適切な供給という規定に依存しない。

一般主義：道徳的思考や道徳的判断の可能性は、道徳原理の適切な供給という規定に大いに依存する。(Dancy 2004, 7、太字は原文イタリック)

個別主義者のひとり、デイヴィッド・マクノートンのことばを借りれば、このダンシーの個別主義は、「道徳原理はせいぜい不要であり、最悪の場合には邪魔だ」(McNaughton 1988, 190) という主張であると理解できる。

(2.2) ダンシーへの批判

ダンシーの全体論に対して、ロジャー・クリspbは、全体論では「不変理由(invariant reasons)」が存在することをうまく説明できない、という批判を提出している(Crisp 2007)。不変理由とは、文脈や状況にかかわらず、つねに行為を支持したり反対したりするにはたらく特徴のことである。クリspbにとって、このような特徴が少なくともひとつ存在するように思われる。たとえば、クリspbは「苦痛が生じること」をその候補として例示する。

T*：ある行為が非理性的な感覚存在に苦痛を生じさせることのひとつであるという事実は、あらゆる事例において、それ〔をおこなうこと〕に対して否定的にはたらく。(Crisp 2007, 43、太字は原文イタリック、〔〕内引用者) [1]

クリस्पは、全体論を「強い全体論 (strong holism: SH)」と「弱い全体論 (weak holism: WH)」とに区別したうえで、SHは不変理由を許容しないということのために、WHは不変理由を許容するが全体論の説明として魅力的でないためということのために、どちらも斥けている。SHとWHは、それぞれつぎの立場のことである。

SH: ひとつの事例で理由となるいかなる特徴も、べつの事例ではまったく理由とならなかつたり、反対の理由となつたりしうる。

WH: ひとつの事例で理由となるある特徴は、べつの事例ではまったく理由とならなかつたり、反対の理由となつたり、あるいはつねにおなじ理由となつたりする。(Crisp 2007, 41、太字は原文イタリック)

つまりクリस्पの指摘によれば、SHはT*の存在を許容できないし(いかなる特徴も不変的でない主張するから)、WHはT*の存在を許容できるが(不変的な特徴が存在しうると主張するから)、そうした説明は原子論に基づく説明とほとんど変わらず、全体論としての魅力がない、ということになる。クリस्पの批判がもし正しければ、あらゆる全体論者は不変理由の存在に訴える批判に対してなんらかの有効な応答をしない限り、理論的な欠陥を抱えてしまう。

(3) 筆者の主張

クリस्पは不変理由の存在に訴えて、理由の全体論を斥けていた。では、全体論の側からはどのような応答が可能だろうか。

まず、SHを擁護するためには、そもそも不変理由が存在しないと許容すれば、その目的が達成される。つまり、クリस्पの批判が依拠する前提が否定されなければならない。

より穏当な応答として、WHを擁護するのであれば、原子論とWHとのちがいを強調し、WHは全体論のひとつのヴァージョンとしてなお魅力的であるということがめざされる。クリस्पは不変理由が存在することとWHの主張が両立することじたいは認めているのであるから、そもそもクリस्पの議論はWHにとって根本的な批判とはならないとみなせる。

くわえて、WHを擁護することにはつぎのような利点もある。すなわち、原子論であればいかなる特徴も不変理由となることを示さねばならないし、SHであればいかなる特徴も不変理由とならないことを示さねばならない。しかし、どちらの見解についてもいかなる特徴もそうである、ということ

示すのは原理的に困難だと思われる。ところが、WHであれば不変理由が少なくともひとつは存在すると示すことができればよい。たとえば、クリスプが挙げるT*はそれのよい候補となるだろう。したがって、WHは原子論やSHに対して、すべての特徴が不変理由となるかどうかについての挙証責任を負わないという点で、理論的優位にある。

ただし、以上のような全体論側からの対処には、原子論側から、とくにWHに対して以下のような再反論がなされるかもしれない。たしかに、ダンシーやクリスプらが想定する原子論の定式化によれば、WHとのちがいは判然としておりその点でWHのほうに明らかな優位性を認めるべきだろう。しかし、原子論の主張を弱めて、例外として不変的でない理由の存在を認めるような「弱い原子論 (weak atomism: WA)」を考えてみれば、WHとのちがいはほとんどなくなってしまうのではないか。それゆえ、あえてWHを支持するメリットはないのである、と[2]。

原子論側からの再反論がどれほど成功しているかをここで詳しくは検討しない。だが、本節で確認したように、クリスプの批判に対しては全体論を支持する立場から十全な応答が可能であると結論する。

(4) 今後の展望

本稿では、ダンシーの理由の全体論、およびそれから導出されるという道徳的個別主義をめぐる論点を検討してきた。さらに、クリスプが提示した、不変理由の存在に訴える批判をとりあげ、全体論側からのありえる応答を考察した。理由の全体論や個別主義の成否をめぐる論争はいまだ継続中であり (e. g. Tsu 2026)、今後の研究が俟たれる。

さて、筆者は今後の研究をふたつの方針で展開してゆきたいと考えている。第一に、ダンシーを主とした、理由の全体論および個別主義の主張がどれほどもっともらしいのかということである。たとえば、ダンシー自身がとる立場はSHなのか、WHなのかということは検討に値する。あるいは、個別主義と普遍化可能性 (universalizability) との関係も重要な論点であろう。

そして、本稿では扱わなかった理由の全体論への批判として、マッキーヴァーとリッジによる「規範的景観の平坦化 (flattening the normative landscape)」批判がある。この批判によれば、靴ひもの色という考慮事項と、苦痛や快樂などといった考慮事項とのあいだに本来あるはずの区別が、全体論的理由観のもとでは失われてしまうとされる (McKeever and Ridge 2006, 47)。しかし筆者の見立てでは、全体論側から説得的な反論は示せるように思われ、この批判もまた決定的ではないと考えている。ただし、マッキーヴァー

一とリッジがどのような懸念に基づいて批判を展開しているかはそれほど明らかではないため、まずはその批判の動機を探る必要がある。

第二の方針として、ダンシーがこれまでおこなってきた研究にかんする包括的な検討をおこないたいと考えている。というのも、ダンシーの研究は多岐にわたっているため、ダンシーの全体論や個別主義をよりよく理解するにはその研究背景を考慮することが望ましいと考えるからだ。以上ふたつの方針のもとで筆者は今後、本稿の内容を洗練させ、理由の本性を探究する。

注

[1] 仮に T* が不変理由として存在するのであれば、このことは、たとえば「苦痛を生じさせる行為は不正だ」という道徳原理が存在することを支持するかもしれない。この点は、匿名の査読者の指摘に依る。感謝する。

[2] WA という立場がありえることについては、菅原一真さんの指摘に依る。感謝する。

(5) 参考文献

Alvarez, M. and Way, J., 2024, “Reasons for Actions: Justification, Motivation, Explanation”, *The Stanford Encyclopedia of Philosophy*, Zalta, E. N. and Nodelman, U. (eds.), URL = <https://plato.stanford.edu/archives/fall2024/entries/reasons-just-vs-expl/> (最終アクセス : 2026/02/05) .

Crisp, R., 2007, “Ethics Without Reasons?”, *Journal of Moral Philosophy*, 4 (1), 40-49.

Dancy, J., 2004, *Ethics Without Principles*, Oxford University Press.

Hooker, B., 2000, “Moral Particularism: Wrong and Bad”, in *Moral Particularism*, Hooker, B. and Little, M. (eds.), Oxford University Press, 1-22.

McKeever, S. and Ridge, M., 2006, *Principled Ethics: Generalism as a Regulative Ideal*, Oxford University Press.

McNaughton, D., 1988, *Moral Vision: An Introduction to Ethics*, Blackwell.

Tsu, P. S. -H., 2026, “Embeddedness and the Psychological Nature of Default Reason: On How Particularists Should Address the Flattening Objection”, *The Philosophical Quarterly*, 76 (1), 365-383.

安藤馨、2014、「道徳的特殊主義についての短い覚書」、『神戸法學雑誌』、63 (4)、85-115。

蝶名 林亮、2015、「道徳的個別主義を巡る論争：近年の動向」、『*Contemporary and Applied Philosophy*』、**6**、1001-1026。

(広島大学)